特集「樽前 arty ＋が観た Still Living ～小河けい編」

美術家・藤沢レオの個展「Still Living」が苫小牧市立美術博物館で開かれています。藤沢にとって過去最大規模の個展であり、作家として実像を伝える貴重な展示です。藤沢が中心となり、美術展や教育現場でのワークショップを手掛けてきたＮＰＯ法人樽前 arty ＋のメンバーが、個展を鑑賞し、それぞれの思いを随時、綴っていきます。

３回は樽前 arty ＋理事であり現在オーストラリア メルボルン在住の小河けい。

個展は１２月２日まで。

「つまんない」

え？

「つまんない、つまんない、つまんない！ つまんないって、いってるでしょう？」

えーーーっっ！ そんなこと言うなよぉ。ってか、大きな声で言わないでね、お願いだから。ほかの人に聞こえてないよね？

もう少し違う言葉を予想していた。「かっこいい」とか「すごい」とか「なにでできてるの？」とか「どうしてひかるの？」とか「これはなんなの？」とか。ありきたりでも次の問いが可能な、対話へとつながる何かを言ってくれると期待していた。四歳の我が息子の感想。

「それは貴方、四歳児には美術館で大人しく鑑賞すること自体がつまんないというものですよ、小河さん。」と、いう方もいるかもしれない。けどですね、それなりに鍛えてきた我が子なのです。生まれる前から『びとこま※1』に参加してたし、先日も美術館に展示されたピカソ作品を前に２０分近く意見交換したし…

まさか「つまんない」と言うとは！ 子どもらしいと言えば子どもらしいかもしれない。大人だったら… 美術館で展示作品に「つまんない」とはなかなか言えない。

さて、藤沢の作品をなぜ息子は「つまんない」と言ったのだろう。私はその視点で、オープン初日に一度見ただけの展示を繰り返し思い出してみることになった。息子の言葉のインパクトに私の初見の感想は吹っ飛んでしまったから。

息子と一緒に鑑賞する、あるいは息子の見方や表現をヒントに新しい目線で作品を味わうことは私の最近のスタイルでもある。メルボルンで暮らすようになって、美術館を楽しむにも全て英語。作品の解説、タイトルや作家名、出身地、生活拠点や画材を読むのも億劫。間違いなく英語な作品解説はともかく、作品名や作家名、地名は何語なんだかわからない、どう発声するのか全く想像できない文字の羅列ということもある。

かつては、作品にくっついている様々な情報を頼りに、作品や作者の文化的あるいは社会的、時代的背景などへも思いを巡らせつつ作品鑑賞をしていた私にとって、なんの情報もなしに作品と向き合うのは結構荷が重い。しかし、チョロチョロ走り回る子どもを連れて、辞書をめくったり、ググったりするのは難しい。そこで始めたのが、このチョロチョロ君と一緒に楽しむ鑑賞。『びとこま』などの活動を通して、アート鑑賞は子どもの文章力や語彙力、観察力、対話力を磨くのではないか？ と感じていたので、ある意味、息子を使った実験でもある。その辺は、またいつか。

さて、つまんないのか？ 藤沢作品。いつものことだけれど、彼の作品はパッと見､美しい。品があって洗練されている。隠し切れない育ちとセンスの良さ(笑)。そこに溶け込むような美しさと言うんではなくて、明らかに異な感じで、そこに在る。けど不快でない。人工的なようで､都会的なようで､懐かしいようでもある。そんな色、あるいは素材、あるいは形、それらの組み合わせ。あのピンク、あの紫、その組み合わせ。ふんわりとした素材で作られたシャープな形。何といっても光る森。私は直感的に、幼い息子が気に入ると思ったのに。たしかに、何か近寄りがたいような雰囲気もある、懐かしく、親しみを感じるのに。寂しげなような。少し恐ろしいような。なぞの力を秘めているような。「しん」としている。「りん」としている。そういえば、テーマは死であり、生であり、生きること、生きていくこと。ああ、そうか。幼い息子は身近な死の経験がまだない。

そこで、思い至る。息子が普段､「つまんない！つまんない！つまんない！」と声を張り上げるのは、食卓で私と夫が、息子には難しい話、息子にはわからない話を始めた時だと。そうか！ 彼は「ぼくにはむずかしいすぎ、わかんない」と言いたかったのか。そうね、たしかに。藤沢の作品を味わうには、人生の経験が少なすぎる。

幼子が表面的な格好良さや美しさに魅かれず､難しさを感じたことは興味深い。侮れない。しかし、それについても、またいつか。

本個展を取材する「びとこま」子ども記者たち

※ 1. びとこま
子ども広報部「びとこま」。
苫小牧市美術博物館と NPO 法人樽前 arty ＋が連携し、苫小牧市内小中学生からなる子ども記者たちが、市内外の文化芸術情報を取材し作成する広報紙「びとこま」の編集・発行をしています。
http://www.city.tomakomai.hokkaido.jp/hakubutsukan/gyoji/kodomo-bitokoma.html

PONARTY（ポナーティ）

住　　所／苫小牧市字樽前 114
ホームページ／ http://tarumae.com
発　行　日／平成 30 年 11 月
発　行　所／ NPO 法人樽前 arty プラス
発行責任者／門馬羊次
装丁・デザイン／堀米和克

本誌に掲載されたすべての記事・画像の転載を禁じます。

［PONARTY の由来］
　PON：アイヌ語で「小さな」の意。
　ARTY：（米）芸術家気取りの意。

拠点となるアトリエの目の前に流れる「ポン樽前川」というキャッチーながら地域性を感じさせる清流の名から派生した造語であり、樽前 arty の小さな活動という位置づけの文芸論評誌として名付けた。